第62号　50円
昭和54年7月25日

内　容

伝統と創造…… 1
岡山猛氏が専務理事に就任…… 2
第40回理事会・第23回評議員会… 2
故正田建次郎先生追悼記念会…… 3
第102回大学共同セミナー …… 4
千人会…… 6
昭和53年度共同セミナー白書…… 7
昭和53年度業務白書…… 8
事業部だより…… 9
館長日記から……11　利用状況…11

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木
（〒192-03）
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京　74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

伝統と創造
――学問の移植と創造

東京大学教授
今道友信

人間が他の動物と異なり著しい特徴を持つのは、人間に創造力があるからである。動物は自然が与えた種の力を発揮することはあっても、個の力によって種の限界を破り新しい次元を拓いていくことはできない。創造は集団の力ではなく個の力であり、その力は「考える」ことに関係している。そこで、創造が学問においてどのようなものであるかを、私の仕事である哲学を中心に、しかも専門的な用語を使わずに、二つの点からお話してみたいと思う。

第一に、近代日本は、学問の移植と創造をどのように展開してきたのか。これは日本と西洋文明との接触の問題であるので、一つの例として「哲学」という言葉がどのようにして出て来たかを考えてみたい。周知のように philosophia は philia と sophia からできたもので、前者は愛、後者は知恵である。しかし、ギリシア語で知恵という語には、他に phronesis（実践的な知恵）と techne（技術的な知恵）があり、sophia は神の持つような間違いのない知恵をさしている。同様に愛についても、eros（人間の感覚的、本能的な愛、求めるだけの愛）と agape（神が持つ与えるだけの愛）があり、philia とは求めもするし与えもする友情のような愛を言う。従って philosophia を単に愛知と訳したのでは、その概念を十分に移植したことにはならない。哲学者の伝記を初めて書いたギリシアのディオゲネス・ラエルティオスはいみじくも言っている。philosophia は本当に文化の高いわれわれヘラース人にしか理解できない語であり、バルバロイ（外国人）はこれを今後も訳すことはできないだろう、と。philosophia は、ピュタゴラスかソクラテスのどちらかがつくり出した言葉と言われるが、特にソクラテスを中心によく使われた。ソクラテスは、sophistes（賢者）と自称する者に対して、基本的な問いを投げかけ、結局、かれらが無知であることを悟らせていった。一体、君は何者かと問われて、ソクラテス自身は、ただ sophia を愛し求めている者だと答えた。西周はこのことを考えつづけ、宋の時代の哲学者、周茂叔の言葉の中の「士希賢賢希哲　哲希聖　聖希天」に思い当たる。つまりその道その部門の知恵を得た人は更に哲ならんことを希う。哲とは明哲にして、人生の根本問題を論じていく知恵のことである。西周はこれこそ philosophia の意味ではないかと考え、文久年間に希哲学と訳すことに成功した。

このように、一つの言葉を訳すことは、ある意味において文化の移植の第一歩であり、しかも等価的な文化がなければ実は移植も簡単ではない。移植には、A（異文化）をそのまま持ってきて、①B（自国の文化）を消してしまう、②Aという言葉を用いてBを加える、③Bの中にAを含ませるようなかたちでAを完全にB化する、という三つの型が考えられる。日本は明らかに第三の型であり、移植というより吸収と言ってよいだろう。このことは日本の文化の高さを示すと同時に、それが必ずしも世界性を持つものではないため、他の文化を吸収的に移植せざるを得なかったという必要性を指摘しなければならない。更に重要なことは、日本には知恵を大事にする伝統が存在していたからである。たとえば異文化に接した最初の時期にすら、弘法大師の「三教指歸」が書かれたように。学問を志す者は、日本の古典を静かに読み返してみる謙虚さが必要である。その謙虚さが、われわれ日本人が日本語を用いて世界の文化に貢献するという使命感を内から刺激することにもなってくる。

それでは、西周の移植はどのような文化的力に支えられていたのか。そのためには移植ないし吸収が、伝統にとってどのような意味を持っていたかを考えてみなければならない。短時間で成功した移植は伝統によって可能となったのであり、しかもその伝統が開かれた性質を持っていたからである。

伝統は自律的なものであるが、伝統に即して考える、とは、他を省き自閉的になることを意味しない。文化は人格に類似している。すなわち、人格は自律性を持つが、他から良いものを取り入れようとする精神によって己れを豊かにする。ここで文化の伝統の自律性とその開放性を説明するために、私は一つの例を提示しておきたい。現代の西洋哲学を代表する実存主義は、責任 responsibilité という概念を極めて重要視するが、自己自身の人格が応答するという意味の責任という言葉が初めて現われるのは、実は一八世紀頃のことである。これに対して人格 persona という概念は西洋に古くからあり、人格概念から責任概念へと自律的な発展があったのである。一方、東洋で人格に相当する良知という言葉が陽明学派によって言われるようになったのは、一七世紀のことであった。しかし、東洋においては古くから道徳の基本の一つとして、天や仲間に対する責任を意味する義という言葉があった。この考え方を基にして次第に良知という言葉を導き出すという自律的展開をしたと考えることができよう。こうして、一七、八世紀に東洋も西洋も自己の伝統にないものを発見した。

近代日本における文化の移植は、自律的発展の必然性から意識的になされたものというより、近代的武装に必要な文明の結果を取り入れるという実際的な目的を主にしてなされ、ある程度成功した。しかし、本当は文化の自律的発展のために自己自身の伝統を豊

（5ページ4段目へつづく）

法人ニュース

岡山猛氏が専務理事に就任

昭和54年7月2日理事会決定

去る4月以来、専務理事欠員のままであったが、7月2日の理事会において前筑摩書房社長岡山猛氏を専任の専務理事に選出した。その席上に岡山氏の出席を求め、茅理事長から紹介され、同氏は就任を受諾し、挨拶を行った。

岡山氏の直接の推薦者は理事の永井道雄氏であったが、出版人であった関係上、当ハウスの理事の中にも、また共同セミナー関係教授達の中にも知人が多く、殊に東大法学部では加藤一郎教授とは同窓であられるなど、今回の専務理事人事には、各方面からの同意があった。今後のセミナー・ハウスのためには、単に法人運営上ばかりでなく、セミナーの企画、新規事業の開拓にも寄与されるものと思われる。

財団法人設立ここに一八年にして、館長、専務理事の二人三脚の時代に入ったわけである。

理事会出席者　茅誠司、川喜田愛郎、中村哲、村井資長、小谷正雄、斎藤進六、小山五郎(代)、福與正治、平島正喜、石館守三、飯田宗一郎

岡山猛氏略歴　大正一〇年東京に生れる。昭和一八年東大法学部卒。昭和二〇年復員後、日本出版協会に勤務。二四年以後、筑摩書房に勤務、『展望』編集長その他を経て五二年社長、五三年相談役就任、五四年六月同社退社。

岡山さんを迎えて

理事　永井道雄

岡山猛氏が去る7月2日、大学セミナー・ハウスの理事会で専務理事に選任された。

あらためて年月を数えると、岡山さんにはじめてお目にかかったのは二〇年も昔のことになる。筑摩書房から『近代日本思想史講座』が刊行されることになり、久野収氏の監修の巻に、私は「知識人の生産ルート」と題する論文を書くことになった。久野さんにお世話になったのはいうまでもないが、編集者である岡山さんから、いろいろ貴重な御助言をいただき、一生懸命に論文を書いた。

筑摩書房が書籍だけでなく雑誌『展望』を刊行して、日本の知的世界に大きな貢献を行ってきたことは広く知られている。岡山さんはその中心であり、多くの執筆者と読者の信頼を得てこられたが、経営の面では苦しまれることもあった。良心的な出版をつづけることは、いつの時代でも容易ではないからである。

飯田宗一郎氏が大学セミナー・ハウスの設立を、茅、上代、大浜などの諸先生に訴えられたのも、ちょうど二〇年前のことであったと思う。セミナー・ハウスが法人になったのが一八年前、開館から数えると一五年目になる。私は開館当時から、この新しい教育に携わる方々の末席を汚してきたが、かえりみると、多くの諸先生、諸先輩、セミナー・ハウスの日常事務に当る方々、学生たち、どれを欠いても今日までの発展はありえなかった。飯田さんが御苦労を重ねられたことは、いうまでもない。

開館当時からの歴史、現在、そして未来を展望すると、セミナー・ハウスの重要性は、年ごとに増すばかりだと私は考えている。それだけにセミナー・ハウスに岡山さんを迎えることができたのは喜ばしく、これからは飯田館長とともに、セミナー・ハウスで働かれる、すべての方々の総意、総力を生かして、第二期のセミナー・ハウスの活動の礎をきずかれることを、私は心から期待している。

（朝日新聞客員論説委員）

◇第40回理事会・第23回評議員会

昭和54年5月28日(月)銀行倶楽部

▼昭和53年度事業報告・決算報告
▼昭和54年度事業計画・収支予算

〔出席者〕
理事　茅誠司、川喜田愛郎、中村哲、沼田稲次郎、斎藤鎮男、加藤一郎、飯田宗一郎
監事　福與正治
評議員　内藤正、三宅彰、村山松雄、諸星静次郎、保坂栄一、平出宣道、大久保道舟

◇

理事会、評議員会合同会議のため、評議員会の議案については沼田稲次郎氏が議長となり審議が進められた。

議案は、それぞれ担当者より詳細に説明、すべて承認可決され／

昭和53年度経常部収支決算書（53.4.1～54.3.31）

収入の部 科目	金額(円)	支出の部 科目	金額(円)
財産収入	485,750	人件費	92,471,344
寄付金収入	2,918,202	事務費	12,544,689
協力会員校会費収入	29,900,000	法人諸費	1,479,430
事業収入	123,055,668	土地建物費	7,601,192
宿泊収入	92,739,520	事業費	46,920,772
施設収入	21,602,987	一般事業費	7,954,912
食堂収入	8,713,161	学生指導セミナー	12,068,471
施設改修協力金	5,757,000	普通セミナー	22,643,877
補助金等収入	16,397,000	国際プログラム	4,253,512
学徒援護会	14,457,000	特別施設改修費	2,652,960
日本国際教育協会	1,940,000	固定資産減価償却費	24,808,103
セミナー会費収入	4,854,000	固定資産除却費	64,829
学生指導セミナー	3,642,000	当期剰余金	2,050,828
国際プログラム	1,212,000		
千人会補助収入	4,570,983		
学生指導セミナー	3,469,471		
国際プログラム	1,101,512		
雑収入	2,655,544		
合計	190,594,147	合計	190,594,147

昭和54年度経常部収支予算書（54.4.1～55.3.31）

収入の部 科目	金額(円)	支出の部 科目	金額(円)
財産収入	600,000	人件費	106,070,000
寄付金収入	1,000,000	事務費	12,966,000
協力会員校会費収入	41,700,000	法人諸費	1,070,000
事業収入	126,632,000	土地建物費	8,853,000
宿泊収入	95,310,000	事業費	49,061,000
施設収入	22,419,000	一般事業費	6,777,000
食堂収入	8,903,000	学生指導セミナー	12,508,000
施設改修協力金	6,060,000	普通セミナー	26,406,000
補助金等収入	16,904,000	国際プログラム	3,370,000
学徒援護会	14,904,000	特別施設改修費	11,110,000
日本国際教育協会	2,000,000	退職給与積立預金支出	1,500,000
セミナー会費収入	5,544,000	前年度繰越未払金支払充当額	12,810,000
学生指導セミナー	4,594,000	予備費	2,000,000
国際プログラム	950,000		
千人会補助収入	4,000,000		
雑収入	3,000,000		
合計	205,440,000	合計	205,440,000
		（資金調整）次年度繰越未払金	20,000,000

故正田建次郎先生を偲んで

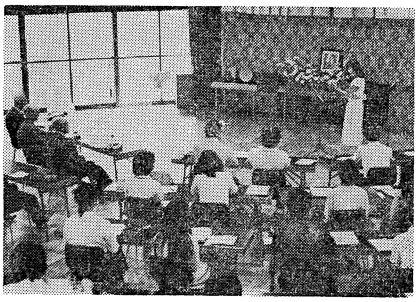
二周年追悼記念会を開催

——昭和54年5月26日

「学問の移植と創造」をテーマとする共同セミナーをご霊前に捧ぐ

当ハウスの元理事長正田建次郎先生が昭和52年3月20日に急逝されてから早くも二年の年月が流れた。当ハウスと先生との関係は昭和43年4月、武蔵大学が協力会員校となるに伴って評議員となられたことが始まりである。その後、46年6月理事に、49年2月には理事長に就任されてからの三年間は広い視野と高い見識で当ハウスの発展に力を尽された。

先生は国立と私立の両大学における豊富なご経験から、大学教育に幅広く活躍されたが、その情熱の一端を当ハウスに傾注された。そのご奉仕に感謝し、また抽象代数学の先駆的業績を残された学者としての先生を追慕するためには、先生が理想とされた学際的討論の場を実現して霊前に捧げることが最もふさわしい追悼会ではあるまいかとは、多くの方々の意見であった。先生の追悼セミナーとしては、当然のことながら数学を中心にすえたものが企画の当初考えられたが、大学共同セミナーの性格からみて、かつて開館五周年記念セミナー「学問における創造とは何か」において、正田先生が「観と勘」と題する全体講義をされたことを念頭におきながら、いわばその延長線上で別掲のような第102回大学共同セミナー「学問の移植と創造——近代日本の場合——」が企画されたのである。



正田建次郎先生の遺影を前にして

追悼記念会は、共同セミナーの開催中に、先生のご子息、正田彬氏、紘氏と別記の来賓の方々をお迎えして行われた。プログラムはまず第一部として、午後一時半より「日本の数学の発展と正田さんのお仕事」と題する記念講演で開始された。予定されていた東大名誉教授弥永昌吉氏がご病気のため、氏が病床で心をこめてまとめられた原稿をもとに、東大名誉教授吉田耕作氏が急きょご講演下さることになった。吉田氏は、正田先生が阪大の数学教室をつくられた頃からの新進の研究者であられ、正田先生とのご交際も極めて長い方のお一人である。

氏は、和算から洋算に移行していく日本の数学の歴史を概括されてから、正田先生がゲッチンゲンのエミー・ネーターの下で、当時興りつつあった新しい数学——現代数学の根本思想となった非ユークリッド幾何学の公理主義の背景の中で、量子力学が必要とした代数系を発展させた抽象代数学——の理論形成に寄与され、日本にそれを移植して数々の創造的業績を残されたことを、数学の門外漢にもわかるように、かみくだいて話された。

第二部の追悼の集いは、三時より国立音大卒業生峰尾淳子さんのピアノによるショパンの「プレリュード」で厳かに開会した。会場の講堂は花に包まれた正田先生のお写真と、先生の奥様から託されて紘氏がご持参下さった先生の作品二点（陶器の花瓶とお皿）が正面に飾られた。挨拶に立った飯田館長は、当ハウスが、先生の最も円熟した時期である晩年の一〇年間に交わりを持ち、ことに最後の三年間は理事長として尊敬の的であられた先生のお顔にこの丘の上でたびたび接する幸せを得たことを感謝するとともに、若い学生諸君は先人の創造的な仕事に対する尊敬の念を新たにし、後を継ぐ者として心を固めてほしい、それが正田先生の霊をなぐさめる最良の方法であろうと述べた。

次に、開館五周年記念セミナーの時、学生の質問に答えておられる先生のお声を録音テープで聞き、国立音大卒業生西村陽子さんのバイオリンが奏でるクライスラー作曲「愛の哀しみ」が流れる中で一同、愛悼の祈りを捧げた。

つづいて、友人として、あるいは弟子として先生と交わりを持たれた次の五人の方々から追悼のメッセージをいただいた（一部を別掲）。——東京都教育委員会から同委員会委員長蠟山政道氏、文部省大学院問題懇談会から東大教授久保亮五氏、大阪大学の門下生として大阪市立大学名誉教授浅野啓三氏と前大阪大学学長高橋陸男氏、大学セミナー・ハウスから顧問・学士院会員山内恭彦氏。

正田先生への思いも熱く、お話も尽きないようであったが、再びピアノによるメンデルスゾーン作曲「無言歌集より」を聴きながら四時半に閉会した。つづいて会場を交友館に移してお茶の会が持たれ、旧交を温める歓談の輪が一時間ほどつづいて散会した。

なお、前記以外の主なる来賓は次のようである。

伊能敬、岡茂男、浅羽二郎、南雲道夫、三村征雄、村山松雄、守屋美賀雄の諸氏。

■追悼のメッセージから

東京都教育委員会委員長
蠟山　政道

私が、旧知の間柄であった正田先生の人間及び業績を本当に知ったのは、東京都教育委員会を通じてでした。正田先生の委員としての真髄に触れるのは、武蔵学園を経営管理されたことと思っていますが、更に重要なことは、会議の一番の中心点は何かという舵の方向を、委員長の傍に坐って示されたことでした。先生の穏健な、しかし学園の管理経験を持つことばが皆に響いて、違った意見を持っている人も互いに協力し合い、意見の一致をみることができたのです。できれば教委は全会一致で、投票を用いて対立するようなこと

た。評議員の人事については職務の異動または、死亡により退任される評議員一一名と新たに会員校代表者として評議員を委嘱する者一二名について承認された。昭和54年4月以降のベースアップについては給与体系、ベースアップ額その他につき常務理事会に一任することで承認された。

▼予算、決算の説明

(1)決算で収入増の主なものは、国際セミナー館、交友館祝賀寄付金と会員校会費の収入増によるものであり、収入減は利用人員の減少で予算人員と決算人員の差によるもので利用ベッド数の増加により更に事業収入の増加に努力したい。

(2)昨年度繰越の宿舎、セミナー室の全面改修工事費三、八〇〇万円の中、繰越未払金一、〇〇〇万円を支払った。

(3)予算の利用者延人員を前年度実績の四％増五万人として利用率五二％を目標とした。

(4)協力会員校会費の増額が承認され、増収分と事業収入の増加に努力し、財政の確立を期したい。

(5)文部省補助金等については、一、四九〇万四、〇〇〇円計上されている。

(6)開館一〇周年記念募金は、指定寄付期限内に目標額に達しなかったので今後は試験研究法人扱の許可をうけているので継続して募金をしたい。

第102回大学共同セミナー

主題――学問の移植と創造

――近代日本の場合――

期日――昭和54年5月25～27日

《全体講義》
伝統と創造
東京大学教授　今道友信氏

《セクション演習》
A　和算の伝統と西欧数学――特にその思想史的側面――
立教大学教授　村田　全氏（運営委員）
B　漢方と西欧医学――未来への足がかりを求めて――
大阪大学助教授　中川米造氏
C　明治の思想家はどこまで西欧哲学を理解したか――西周の場合――
慶応義塾大学教授　小泉　仰氏
D　国語構文論の形成――本居宣長の係結法則とその流れ――
東京女子大学教授　水谷静夫氏
E　近代日本経済思想の考察
東京外国語大学教授　長　幸男氏

《参加学生》26名（内女子10名）慶大、早大（各4）、東女大、日女大、横浜市大（各2）、東外大、横浜国大、青学大、上智大、聖心女大、東経大、慈恵医大、日大、文教大、武蔵大、青山学院短大、大妻女子短大（各1）合計17校。

◇

かねてより故正田建次郎先生の追悼記念にふさわしいセミナーが実現される機会を待っていたが、正田先生が全体講義をされた開館五周年記念セミナーで指導教授の一人として参画された村田全氏に企画の中心的役割を担っていただくことにより、先生が亡くなられて二年、念願のセミナーが具体化した。折から共同セミナー委員会では、「人間の創造性」をめぐって一つの企画を検討中であったので、いわばこれを譲り受けたかたちで急きょ村田氏と企画室で構想が練られることになった。

故正田先生が半世紀前、当時興りつつあった新しい数学を日本に移植され、先端的な研究を進められたことを念頭におきながら、日本の文化的伝統という基盤に立つわれわれ日本人の学問の有り様を、現代的意識の下で検討してみようとするのが、このセミナーの目的である。セクションを編成するに当り、一〇ほどの学問分野が取り上げられたが、最終的に、正田先生ゆかりの大阪大学からお迎えした中川米造氏をはじめ、それぞれの分野で独自の研究を進めておられる方々が快くこの趣旨に応じて下さったのは幸いであった。

◇

プログラムの冒頭で行われた今道友信氏の全体講義（要旨は一頁参照）はセミナーの極めて適切な導入部となり、参加学生に大きな示唆と感動を与えた。

つづく夕食後の共通セッションでは、セクション指導教授からそれぞれのテーマの下で問題提起がなされ、参加学生は早くも〝ヨーロッパ精神と日本の伝統〟という大きな枠組の中に放り込まれることとなった。

二日目の午後は、故正田先生の追悼記念会（三頁に別掲）が行われた。友人あるいは弟子として先生とご親交のあった方々から、直接、先生の学問とその人となりが語られ、参加学生は、学問を通じた出会いの素晴らしさの一端に触れることができたようである。

最終日の全体集会では、各セクションの報告につづいて活発な質疑応答が繰り広げられたが、討論の焦点に深くかかわる問題点の主なものを拾ってみると、例えば、自然的世界の底に数学的理法がある、という一つの世界構想を背後のエートスの中にもっていたヨーロッパの数学と、それを一つのシステムとしてのみ取り入れた日本の問題、あるいは功利主義を自らの思想的土台の上に同定した西周と、かれに見られる西洋思想の制限的移入を導く社会状況、あるいはまた、科学という西洋的普遍を歪みを生みながら、受容しえた条件として考えられる日本の類型的独自性などが指摘されうるところである。こうして到達したのは、同じ「学問の移植」として論じていても、主体的方向づけを必要とする思想と、生活の場面にかかわる技術との間に非常に大きな断層があり、それを認識することが大切である、ということの確認であったようである。

◇

今回のセミナーは企画側の予想に反して、参加者数わずかに二六名という共同セミナー始まって以来の最少を記録した。セクションの中には学生一人という、セミナーというより個別指導になったところもあり、参加学生にとっては極めて恵まれたものとなった。全体の主題と、個々に置かれたセクションのテーマとの連関が、学部学生にはかなり難解であったことが参加者の少ないことの大きな理由と思われるが、「大学共同セミナー」という一つの器に、どのようにセクションをアレンジするか、専門分化したテーマを掲げることの限界点を、これを契機に今一度反省してみなければならないだろう。

しかしながら閉会に当り、「もっと多くのことを知り、的確に表現したいと思った」という学生の発言を受けて、村田氏は、「人は互いに了解し合わない。なぜなら人は同じ言葉を話さないから。そしてまた互いに了解しえない言葉があるのだから」というポアンカレーが数学の中の論争で言ったという言葉を引用されたが、このセミナーで得たものは、具体的な成果で答えられるものではないだろう。別掲の参加者の感想文にあるように、大学共同セミナーが〝学問の総論〟の発見の場であることは今も変わっていない。

学生の総括討論を聞く
（右から村田，小泉，長，中川，水谷の諸氏）

／とはしない、という私の願いが叶えられたのは、正田先生の正当な意見に負うところが多かったことを、どうか皆様も心の中にとどめておいていただきたいと思い、本日ここに参った次第です。

大阪市立大学名誉教授　**浅野　啓三**

私は正田研究室の助手第一号です。数学の先生は大なり小なりアブノーマルなところがあるとされていたようですが、正田先生はノーマルな、数学者としては珍しく非常に穏やかな方でした。正田先生は何かいい思いつきがあってそれが出来ると、手放しで〝うれしい、うれしい〟と言って喜んでおられたのが、今でも目に浮かぶようです。私共もそれなりに考えて、何か出来たことを談話会で話しますと、殊のほかうれしそうに聞いて下さったことを思い起こすのです。

「よく学びよく遊び」ということを非常に重視され、率先して範をたれ、数人のメンバーがこれに和するということで、数学教室になごやかな雰囲気をもたらしました。ここにおられる吉田耕作先生はじめ多くの優れた数学者が輩出したという偉大な事実だけとり上げても、正田先生がおいでになったということだけで数学の勉強に良い環境をお作りになったことがおわかりいただけると思います。

再び〝総論〟を求めて

城　謙輔

毎日の生活の中で人間が人間としてほんとうに求めているものはなにか。その人間とは本来どうあるべきものなのか。こういった疑問は人間である限り、潜在的、顕在的に誰もが持っているものである。それを職場を離れ、家庭を離れて真剣に問いなおす機会が意外に少ないことを痛感する。社会とはそういった意味での個人の精神的自由ないしは余裕がなかなか認められにくい所のようである。

私は大学卒業後六年になる。そして「学問」といった言葉を久しく聞かなくなっていた。今思えば学生という身分はやはり社会の中で特殊な位置を占め、その時代はまだ「学問」という言葉が生きていた時代で、その中にむしろ純粋培養されていたと言えるかもしれない。しかし実社会に入ると突然その言葉が意味をなさなくなり、もし総論・各論という区別が許されるならば、生活のすべてが各論となってしまったかの感がある。なるほどものを学び初めの頃は総論→各論という順序を経たことは経験しているが、学生から社会人へという過程の中で、学問の場合もはたして一方向のものであろうか。各論→総論というくみあげが同時にいつも必要なのではないだろうかという疑問に端を発し、はたしてそれが可能なのだろうか。そしてついにそれが存在するのだろうかという疑問にまで来てしまった。

そして八年ぶりにこの大学共同セミナーに来てみて、今なお実に脈々と学問の総論が生きていることを知った。さらに全体講義、セクション演習においてそれぞれの先生との触れ合いの中で、私がこれまで骨身を削って保持し、まさに折れかけようとしていたものが優しくそして強く支えられるのを感じた。他の専門分野に入り新しい学問を勉強しなおすことは難しい。しかし三日間寝食を共にし、各分野の学問にせめて少しでも接触する機会を持てたこともすばらしい。学生、社会人の区別なく、人間が学問を必要とする限り、社会でのこの大学共同セミナーの使命と役割は大きい。

（東京慈恵会医科大学病理学教室）

▽

共同セミナーで得たもの

吉岡素子

共同セミナーに参加したいという大学入学以来の希望を三年になってようやく実現することができて、セミナーの終わった今、一種の満足感が私の心を満たしている。これでようやく大学セミナー・ハウスの学生になれたようである。

このように大変意気込んで共同セミナーに参加した私は、参加者二六名という夢のような環境に恵まれて先生方とも納得のいくまで質疑応答ができた。その中から感じたことは、学問の多様化に対する認識を深めなければならないということである。私の入れていただいたDセクションの演習の中心は、記号の形式的体系を扱う代数学を大幅に取り入れて、本居宣長の研究を理解することであった。国語学と数学が随所で握手しているような感じである。もはや、専門領域に関する従来の狭い考え方では、受容しきれないほど学際化した研究が進んでいるのだということが、セクション演習の際の一番強い印象であった。

そして、そのような学際的な研究を進めるためには、まず基礎となる勉強を充分しておかなければならないと感じた。その点から自分自身を見てみると、知っていること、ほんとうに理解していることは数えるほどもないということを再認識することになった。

もう一つ勉強になったことは、現象に対する把握のしかたについてである。わたしたちはとかく、表面上の現象に目をうばわれ、その根底に流れる思想、概念や考え方などに気づかずに通りすぎてしまうことが多い。今、わたしたちに必要とされているのは、ものの本質を見抜く鋭い目ではなかろうか。江戸末期の国学者、本居宣長はこの鋭い目をもちあわせていたようである。学生時代に、どこまでこの鋭い目に近づくことができるかは疑問である。しかし近づく努力は怠たりたくないと思う。

そして、それとともに自分を支える基盤を作らなくてはいけないということを感じた。どのようなテーマを論じるにしても、自分の意見、考え方が定まっていないと何も言えないのである。逆に何か一つ、これならば人に負けないというようなものを持っている人は強いのではないであろうか。自分のいる地平をしっかりとみつめて地盤を固めることの必要性に気づいたのが、このセミナーにおける大きな収穫であった。

（上智大学国文学科三年）

（1ページよりつづく）

かにする相手として他の文化に接することが大切である。このような文化的対話には理論的移植がなければならない。その時に不可欠なものがクリティークの精神である。critique とはギリシア語の krinó に由来し、強い者、優れた者を選び出すという意味であるから、実は出判ではなく、良いものを選びとることなのである。しかも最も大切なことは自分自身についてのクリティークである。自己の文化は自国の言葉によってつくられていくものであるから、その伝統を知らずして自己を語ることはできない。文化的伝統の自律性、開放性とはこういう意味である。

そこで、学問の創造とは何か、ということを説明したい。創造とは伝統を破壊するものと一般に考えられているが、本当に創造的な仕事をした芸術家は、伝統を形成している作品を非常に大事にしている。学問における創造も同様である。それは、学問も芸術も人間の知恵の結晶を常に目の前に置いておかなければできない営みだからである。過去の作品や業績に対する尊敬がないところに、芸術や学問の創造はない。伝統と共存しながら、それを乗り越えようとするものであるという意味で、創造とは破壊ではなく競争である。創造はこのような伝統との競争によってまた新しい伝統を形成しつつ、時間や時代の観念を越えて永遠に向かう。人間の現実の生活の中で永遠につながるものは創造を産み出す人格の深みにしか存在しない。どんなに良い目も永遠を見ることはできないし、どんなに力強い手も永遠をつかむことはできない。

創造は、本来、神にしか許されないものであるが、人間の創造が語られるのは、確かに制作とは違った営みだからである。制作は、多くのものを組み合せて一つのものをつくるという組み立てであるが、創造は、未知なるものから自己と同じものを産んでいく生産である。組み立ては分析によって学ぶことができるが、生産に必要なものは人間の生命力である。それは、いわば一見学問から離れているようなもの、つまり目的や観念に集結する前の憧れとか夢なのである。

学問は確かに理性の仕事である。あるいは一段下の悟性までの仕事であり、知覚や感覚はそれを支えることはあっても、理性や悟性によって否定されることがある。しかし、その学問的創造としての理性の仕事を導き励ますものとして、憧れや夢が具象化される力としての想像力というものをどうしても考えておかねばならない。想像力を養うことは、自分が何に憧れているかを探すことである。ニーチェは『ツァラトゥストラ』の中で、愛や憧れを星という言葉で表わし、「見よ、私はあなた方に（創造の自由をもたない）末人を示そう」と言うが、末人とは星を知らない人である。一生をかけてもできるかどうかわからない憧れを想像力によって持つのでなければ、学問における創造もあり得ないし、結局は伝統の継承も途絶えてしまう。

（第一〇二回大学共同セミナーの全体講義より。文責・編集者）

▼千人会

昭和54年4月～5月現在

小林　哲也
（京都大学教授）
（5月2日付企画室主事宛書簡より）

◇**現在、会員は一、五七五名です**

大学人　一、一九二名
社会人　三八三名

◇**新しく会員となられた方々**

11名〔第48回報告（申込順）〕

B　明治大学助教授　西野万里殿
C　京都大学助教授　豊田昌倫殿
C　法政大学教授　村上　直殿
C　セルフイメージ開発研究所
　　国際親善情報センター
　　井上主泉道殿
B　明治大学教授　圭室文雄殿
B　東京芝浦電気㈱　佐野雄二殿
B　主婦　佐野厚子殿
C　横浜商科大学講師
　　平野文彦殿
C　音楽家　坂本菜穂殿
B　京都大学教授　小林哲也殿
B　慶応義塾大学教授
　　小泉　仰殿

◇**入会のことば**

昨年暮の大学教員懇談会は大変ご成功の由嬉しく存じました。

同封で千人会の申込みをさせていただきます。京都に住んでおりますと、何となく東京でのことが遠く感じられ、今まで申し込まないままになっておりました。しかし3月に館長先生に偶然お目にかかり久しぶりでお話などしておりますと、どうもなかなか縁は切れそうもありません。遅ればせながら、多少のご援助をさせていただくことにしました。

いつまで京都にいるかわかりませんが、いずれ関東にもどる機会でもありましたならば、大いにセミナー・ハウスを利用させていただけるのを楽しみにしております。

◇**会費ありがとうございます**

昭和54年4～5月（敬称略）

金子靖、池田和夫、斎藤恵彦、渡利千波、鴨澤巌、新見宏、都留春夫、原一雄、加藤寛、佐藤公孝、鈴木友二、島田治夫、池原義郎、井出翁、安斎伸、菊池百合、若山邦紘、公文俊平、館逸雄、大槻盛一、長里静子、百瀬宏、林邦夫、小泉文夫、木村建一、中島康孝、小俣喜久治、村井実、大原栄一、角尾稔、村田和巳、本明寛、石坂巌、原口隆英、村上正夫、豊島広司、小原孝一郎、江淵浩美、堤彪、関根隆光、有賀弘、白井泰四郎、鈴木達雄、三上次男、塩田庄兵衛、辻清明、海老根宏、下川浩一、堀野定雄、西勝、江幡玲子、立入広太郎、染谷恭次郎、馬場伸也、石渡毅、安藤賢一、大河内正陽、栗本弘、木村増三、上村学、前田愛、小島蓉子、山崎誠、桜井育子、飯尾右一、桐生冨久、高峯一愚、檜田信男、龍池隆、津田慶子、小原清成、奥野忠一、蒲生叡輝、竹内昭夫、後藤捨男、森田桐郎、松原秀一、小泉一郎、羽田三郎、橋村直忠、下出積興、伊倉退蔵、小菅東洋、清永昭次、井上宇市、瀬部孝、岡田和美、金子六郎、狩野紀昭、矢野洋四朗、犬塚博、高橋康之、横山勝信、水谷三公、橋口英俊、二宮永蔵、青木清明、山崎邦彦、満田郁夫、下森定、鈴木悌二、工藤康雄、木原太郎、向山文雄、佐伯彰一、正田亘、冨山芳正、村田喜代治、北野弘久、木島康彦、中村英雄、岩崎英二郎、加藤一郎、芳賀徹、橋本次郎、羽田新、川口弘、岡田純一、松井共子、中岡保、高木健太郎、菅沼憲治、野間三郎、荒井献、仁科雄一郎、久保田静枝、大橋健八郎、大野佐喜子、井早康正、梅沢文輔、天城勲、今井栄、岡安茂祐、近藤正夫、阪本泉、今井義夫、内田祥哉、山之内靖、深海博明、細谷千博、近藤裕、大村晴雄、関口忠、波多江俊郎、岡田巳代次、角田稔、中村孝俊、峰岸純夫、末武国弘、田中恵美子、西宮輝明、佐藤経明、千野熊男、芹沢栄、手塚一朗、矢沢大二、水谷真智子、秋間実、金子美千代、佐藤雄二、赤攝也、高橋三雄、原治、川喜田二郎、栗田見瑞、長谷川幸男、芳野赴夫、福田一郎、川添奈津子、安藤利亮、玉真秀雄、木村健二郎、大塚久雄、鈴木正紀、菅野暁、内田市五郎、島内武彦、奥山典生、沢崎守孝、山本幹夫、浅野明子、鈴木二郎、竹村猛、朝野洋一、野見山不二、栃原敏房、今道友信、徳永勇雄、川名明、竹内喜代司、柴垣和三雄、児玉昭太郎、松井源吾

◇**会費に添えられた言葉を拾う**

♡

2月に久しぶりに利用させていただき、充実ぶりに感心しました。とくに交友館の発想に賛成です。

東京大学助教授　有賀　弘

♡

今年は大学を卒業して三〇年、現在地に開業して二〇年、満五五歳の誕生日を迎えることになりました。長い人生の一つの節目のように思われます。多謝、奮励。

江淵医院院長　江淵浩美

♡

千人会の会員も一、五〇〇余名となり、ますますのご発展をお慶び申し上げます。私も七八回目の誕生日を健康で迎え、自分ながら喜んでいます。旧職員　豊島広司

♡

京都で暮す日が多くなり、八王子をお訪ねする機会が遠のいたことを物足りなく思っています。

立命館大学教授　塩田庄兵衛

♡

美しいカードでの誕生祝い、まことに有難う存じました。私も半世紀を生きのびたことになりました。

東京大学教授　竹内昭夫

♡

セミナー・ハウスの充実した成長ぶりに驚いています。その活力は何でしょうか。主婦　桜井育子

♡

「セミナー・ハウス」も毎回多謝。59号の館長日記の玉川直重先生のご葬儀には私も出席させていただきました。都立大学の学生だったときから、先生からラテン語をお教えいただき、以来、二五年余のご交誼をいただきました。多忙でセミナー・ハウスに伺う折を得ないのが残念です。

学習院大学教授　清永昭次

♡

これからA会員に入れて下さい。

学習院大学教授　小泉一郎

♡

おかげさまでいよいよ元気に働いております。館長先生のご健勝を祈ります。

横浜国立大学教授　伊倉退蔵

♡

C会員からB会員にならせていただきます。

青山学院大学教授　羽田三郎

♡

カードに館長さんの直筆が見られなくなったのが、少し淋しいです。明治学院大学教授　満田郁夫

♡

還暦を迎えるに当り館長先生よりご丁重なお祝辞をいただき、まことに有難うございました。セミナー・ハウスの益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

法政大学教授　横山勝信

♡

大学の好意で二年間パリで勉強させて頂くことになりました。漸く留守を致します。飯田先生のご壮健を祈ります。

成蹊大学助教授　岡田巳代治

♡

5月の4～6日は息子がロータリーのローターアクトの会でお世話になりました。主婦　浅野明子

♡

4月中旬より中国に行っていましたので、お送りするのが遅れました。誕生日は南京で迎えました。

横浜市立大学教授　佐藤経明

♡

仕事も二年目を迎え、ようやく地に足がついてきたような気がしています。皆様のご壮健をお祈り申し上げます。

浦和地方県民センター勤務
松井共子

♡

誕生祝いのカードをいただき、いつも忘れていた日を覚えさせて頂き感謝いたします。大学セミナー・ハウスのよき歩みをお祈りいたします。

主婦　今井　栄

昭和53年度　大学共同セミナー白書

昭和53年度は、第100回記念大学共同セミナーを中心に展開した一年であった。これを記念した事業として式典、『一〇〇回の歩み』編集発行、第15回大学教員懇談会があげられる。このため、表1のように年間の実施回数は4回（例年7～8回）であったが、交友館落成記念として企画された第98回や、国際セミナー館の落成に併せて別途実施された国際学生シンポジウムなど、記念行事とともに多彩なプログラムが繰り広げられ、企画室は多忙を極めた。

第100回記念セミナーは三泊四日（通常は二泊三日）の会期で、指導教授陣総勢一四名、参加者一二〇名の文字通り大型学際セミナーとなった。その上、第98回、第101回ともに学際的色彩の濃いセミナーであったため、表2のように学科別参加者の分布をみると、人文系と社会系のバランスもよく、従来、参加が少ない自然系も一五％となって、51年度の一八％に次いで多い。

全体の参加者数は、実施回数が少ないため、前年度の七一四名に対して四〇七名と当然のことながら少なくなっているが、面白いことに男女の割合をみると、はじめて女子が男子を上回った。ちなみに私立大学に限っていえば、二年前から女子の参加が若干男子を上回り、これで三年連続を記録したわけだが、特に本年度は男子より女子が五二名も多くなっているのが注目される。

参加者数の多い大学の上位五校は、早稲田、津田塾、東京、慶応と四校までが前年度と同様の顔ぶれであるが（順位は若干入れかわっている）、四番目であった筑波大が大幅に減少し、第99回芸術セミナーに大挙参加した共立女子が入った。

〔表1〕　大学共同セミナー開催状況

回数	会期	主題	指導教授	参加人員
第1回（No. 98）	5月26～28日	日常生活―そのルーツと展望―社会・文化・パーソナリティー（交友館落成記念）	広中平祐　宮本常一　芳賀　徹 ※山岸　健　原　芳男　中鉢正美 香原志勢（谷口汎邦）（勝見允行）	106名（27校）
第2回（No. 99）	7月14～16日	藝術のたのしみ（第3回）―美術・音楽におけるヨーロッパ・ルネッサンス―	前川誠郎　遠山一行　戸口幸策 鹿島　享　荒木成子　※友部　直 勝　国興　大橋敏成	104名（35校）
第3回（No.100）	10月7～10日	21世紀に向かって―学問と人間の問題―（大学共同セミナー第100回記念）	伏見康治　坂桓與一　佐伯彰一 渡辺　格　山田圭一　坂本賢三 高瀬　浄　由良君美　野島秀勝 溝淵　潔　中村桂子（岡　宏子） （野田春彦）（荒川幾男）	120名（39校）
第4回（No.101）	11月24～26日	映画表現と人間―チャップリンと20世紀文明―	淀川長治　※荒井良雄　品田雄吉 白井佳夫　宮下啓三（山岸　健）	77名（32校）

※印は，運営委員を兼ねた講師。（　）内は運営委員を示す。

〔表2〕　大学共同セミナー参加状況（計4回）

【大学別参加者数】

＜国立大学＞	（18校）111	（39）
東京	34	（5）
東京工業	17	（1）
東京外国語	15	（9）
お茶の水女	11	（11）
一橋	8	（5）
筑波	7	（2）
横浜国立	5	（1）
東京医科歯科	2	
東京農工	2	
電気通信	2	
群馬	1	（1）
埼玉	1	（1）
東京学芸	1	（1）
東京芸術	1	（1）
信州	1	
名古屋	1	
京都	1	
大阪	1	（1）
＜公立大学＞	（2校）15	（3）
高崎経済	14	（2）
横浜市立	1	（1）
＜私立大学＞	（44校）272	（162）
早稲田	53	（12）
津田塾	37	（37）
慶応義塾	28	（7）
共立女子	22	（22）
東京女子	12	（12）
国際基督教	11	（6）
立教	9	（4）
上智	8	（4）
日本女子	8	（8）
中央	7	（1）
聖心女子	6	（6）
明治学院	5	（3）
学習院	4	（3）
武蔵	4	（2）
明治	4	（1）
同志社	4	（1）
独協	3	（2）
青山学院	3	（3）
上野学園	3	（3）
国学院	3	（2）
成蹊	3	（2）
成城	3	（2）
専修	3	
東京経済	3	
跡見学園女子	2	（2）
共立薬科	2	（2）
駒沢	2	
清泉女子	2	（2）
多摩美術	2	（2）
法政	2	
文教	1	（1）
大妻女子	1	（1）
国立音楽	1	（1）
実践女子	1	（1）
芝浦工業	1	
昭和女子	1	（1）
白百合女子	1	（1）
東洋	1	（1）
日本	1	
武蔵野音楽	1	（1）
明星	1	
鶴見	1	（1）
同志社女子	1	（1）
＜短期大学＞	（5校）7	（7）
青山学院女子	2	（2）
学習院女子	1	（1）
共立女子	1	（1）
駒沢	1	（1）
東京経済	2	（2）
その他（大学講師及び助手）	2	（0）
計　64 大学	398	（204）
計　5 短大	7	（7）
計　その他	2	（0）
合計	407	（211）

【学年別・男女参加者数】

区分	1年	2年	3年	4年	大学院	その他	計	比率（%）
男	19	31	61	58	19	8	196	48
女	18	33	97	49	7	7	211	52
計	37	64	158	107	26	15	407	100
比率（%）	9	16	39	26	6	4	100	

【学科別参加者数】

学科	参加者数		計・比率	
文学	103	（74）	166	41%
史学	7	（3）		
哲学	28	（21）		
教育学	15	（10）		
その他の人文科学	13	（7）		
法学・政治学	38	（7）	139	34%
商学・経済学	51	（6）		
社会学	24	（16）		
国際関係学	23	（21）		
その他の社会科学	3	（1）		
理学・工学・農学	53	（9）	62	15%
医学・歯学・薬学	9	（3）		
家政	11	（11）	11	3%
その他	29	（22）	29	7%
合計	407	（211）	407	100%

（注）（　）内は内数で女子。
その他…研究生，聴講生，専修科，大学校，卒業生，中高教員。

昭和53年度 業務白書

収容定員二四〇床から二七〇床に、利用者初の四万八、〇〇〇人台

昭和53年度は国際セミナー館の新設により、当ハウスの宿舎の収容定員が7月以降二四〇床から二七〇床に増加した。これにより年度当初には年間の利用人数五万人以上達成を目標にしたが、これは8月、10月に長期滞在の大型グループに大幅な減員があったこと、また各大学の学年末試験を前にした1月の利用率が本年度も低かったことなどもあって、実現できなかった。しかし、本年度の宿泊延人数は四万八、五三九人を数え、51年度につくられたこれまでの最多記録四万七、六三一人を上回る新記録となり、当ハウス開館以来初めての四万八、〇〇〇人台をマークすることができた。

宿泊利用者延人数五〇万人突破

一方、開館以来の宿泊利用者延人数が昭和53年10月20日をもって五〇万人に達するという喜ばしい記録もつくられた。昭和40年7月5日の開館記念セミナーで最初の宿泊者を迎えてから一三年三ヵ月にして達成された記録である。

ゼミ回数、新記録の一、一九七回

本年度更新されたその他の記録を拾うと、まず年間ゼミ回数の一、一九七回で、前年度につくられた最多記録（一、〇九六回）を更新し、三年連続一、〇〇〇回台を上廻った。月平均は九九回となるが、9月の一三九回は月間ゼミ回数の新記録である。また、初めて厳寒2月に一二六回となったため、ゼミ回数一〇〇回以上が7月、8月、9月、12月、2月、3月と年間六回を数えたことも、これまでになかった記録である。また、前記宿泊延人数（年間四万八、五三九人、月平均四、〇四五人）の記録更新にあわせ、宿泊実人数（年間二万八、九四三人、月平均二、四一二人）も新記録となっている。

利用者の種別と会員校の利用

本年度の利用状況を利用者別でみると、表2のとおりである。ゼミ回数によって利用の頻度を示すと、「大学連合」を含めて全体の八〇%が大学および学生の利用であり、七%が「学会・教育団体」となる。この「学会・教育団体」の主催する各種研究集会や国際会議には大学の教師や学生も多数参加しているから、これを含めると九〇%に近い利用者は大学関係者ということができる。また、以上の比率がここ数年大きな変化なく持続されていることからも、当ハウスが大学共同の施設としての機能を果しているといえよう。

53年度中に五四校となった協力会員校の利用については、ゼミ回数で七一七回（構成比六〇%）、宿泊延人数ではこれまでの最高である二万三、五三七人（四九%）を数えた。会員校の連帯の中に運営の基盤を持つ当ハウスとしては当然の数字であり、この利用率は今後一層高められねばならない。

ちなみに本年度は、東京大学が年間利用回数六五回で前年度の東京都立大学に代って最多利用校となったが、以上の二校に早稲田大学を加えた三大学が、ここ五年間連続して最多利用上位三校となっている。宿泊延人数としては早稲田大学が一、五三七人で50年度以来四年連続最多利用校となった。

宿舎稼働率三五三日—五二%

本年度の当ハウスの宿舎の収容定員は、6月までの三ヵ月が従来どおり二四〇床、7月以降の九ヵ月は前記のとおり国際セミナー館の三〇床を加えて二七〇床となった。宿舎の稼働日数は、施設整備と年末年始の休館日数を差引き、年間三五三日。前記宿泊延人数四万八、五三九人を宿舎の稼働率に換算すると、年間の平均は五二%となり、収容定員の増加で前年度の五五%を下回った。なお、6月24日以降の国際セミナー館だけの宿舎稼働率は五六%で、同館が学会や国際会議を中心によく利用されたことを示している。ことに、同館の中小四つのセミナー室を各種のグループにも提供しているので従来以上に利用者の受入れを一層好意的、目的的、便宜的に考えることができるようになった。セミナー室の増加によって利用者の利点は拡大した。

稼働率が年間の平均を上回った月は4月、5月、7～10月、12月、3月の八ヵ月。このうち5月、7月、9月、10月の四ヵ月は六〇%を上回っている。また、平均を下回った月は6月、11月、1月、2月の四ヵ月で、特に1月は三〇%を割った。この月は各大学の学年末試験の迫る時期で、週末を除くと学生の利用が極端に少なくなっている。ちなみに、宿泊延人数四万八、五三九人は、月平均では四、〇四五人、一日平均では一三五人となる（表1）。なお、これは統計的な数値であって、実際には二〇〇人を超えた日が年間三五三日中一二〇日近くあった。

〔表1〕 月別利用状況

月	ゼミ回数	宿泊延人数（人）	定員比（%）
4	87	4,046 (4,208)	56
5	88	4,581 (4,824)	62
6	65	3,259 (3,288)	45
7	104	5,358 (4,257)	64
8	104	4,387 (5,324)	52
9	139	5,066 (4,673)	63
10	97	3,894 (3,990)	47
11	91	4,188 (3,011)	52
12	108	3,580 (3,913)	58
1	79	1,578 (1,698)	22
2	126	3,733 (3,594)	49
3	109	4,869 (4,427)	58
計	1,197	48,539(47,207)	52
月平均	100	4,045 (3,934)	52
1日平均	3	135 (133)	

（ ）内は前年度数。

〔表2〕 利用者別宿泊人数・ゼミ回数

	ゼミ回数	比率（%）	宿泊延人数（人）	比率（%）	1団体平均実人数
会員校	717(726)	60	23,537(22,725)	48	22(21)
非会員校	209(142)	17	6,016(6,206)	12	44(44)
大学連合	30(31)	3	3,549(4,498)	7	57(64)
学会・教育団体	88(102)	7	8,284(9,117)	17	43(43)
官公庁・経済団体等	153(95)	13	6,832(4,521)	14	27(27)
個人	—	—	321(140)	2	—
合計	1,197(1,096)	100	48,539(47,207)	100	25(26)

（ ）内は前年度数。

〔表3〕 会員校利用状況

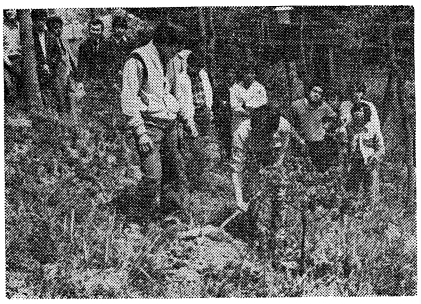
順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数
1	東京大学	65	1	早稲田大学	1,537
2	早稲田大学	63	2	東京大学	1,485
3	東京都立大学	54	3	東京都立大学	1,452
4	中央大学	51	4	法政大学	1,173
5	法政大学	34	5	東京学芸大学	1,151
6	慶応義塾大学	32	6	東海大学	848
7	東京学芸大学	27	7	立教大学	839
7	明治学院大学	27	8	慶応義塾大学	828
8	明治大学	26	8	青山学院大学	828
9	青山学院大学	25	9	明治大学	805
9	立教大学	25	10	中央大学	789

事業部だより
新入生オリエンテーション合宿特集

●4月の第一週は、春休み最後の週。会員校のゼミ合宿を中心に、連日二〇〇人台の宿泊者――今年もそのような賑わいの中に新年度を迎えた。そして早くも第二週目からは、各大学の新入生オリエンテーションが相次いで繰り広げられ5月には最盛期となる。

●4・5両月の利用状況を数字で示すと、4月はグループ数一一三、宿泊延人数五、〇三二人（宿舎利用率六二％）、5月はグループ数九〇、宿泊延人数は五、三九六人（利用率六四％）となる。これらはいずれも開館以来の両月のこれまでの最多記録を更新する数字である。このうち新入生オリエンテーションの利用が占める率は圧倒的に高く、4月については二一グループ（一九％）、宿泊延人数一、九四九人（三九％）、5月については三グループ（二三％）、二、三一六人（四三％）となる。このうち約半数が一〇〇人を超える規模の合宿で、全群使用またはそれに準ずるものは、両月で六回を数える。

●このようなわけで、若葉から青葉への時期のトピックは、フレッシュマンの合宿に集中せざるを得ない。ことに近年、大学主催の学部、学科ないし組単位の新入生合宿が増加の傾向を示していることは見逃すことはできない。これは、高校生活を受験準備に終始した新入生を迎え入れる大学側の苦悩と任務の重さを反映し、その対応策の一つとして企画された〝宿泊を伴うオリエンテーション〟の意義が教職員と学生の双方から確実に高く評価されてきていることを物語るものであろう。新入生の合宿は7月中旬まで続けられるのであるが、ここでは4・5両月に行われたオリエンテーションの中から、いくつかを選び、参加者から寄せられた感想文を紹介しながら、オリエンテーションの効用のほどを探ってみよう。


記念植樹（東海大医学部新入生オリエンテーション）

【東大教養学科】 同学部内自治団体の代表で構成されるオリエンテーション委員会が企画・運営するもので、今年は4月中旬に前後三回、計三六七名が参加、各クラス毎に数名の二年生がオリターとなって自主的な合宿を行った。

△

八王子。その美しい自然の中、私達新入生は、『新しい大学生活』の一歩を踏み出すことができた。マスプロ教育、受動的な聴講、学生の創造力の低下が問題とされている現在、このセミナー・ハウスでの生活は、本来あるべき大学の姿を私達に教えてくれた。まだそういった大衆化した大学教育の洗礼を受ける以前の段階にいる新入生にとって、このことはきわめて重要な意味をもつと思う。

オリターを囲んでの座談会では、心理、教育、文学、政治、社会学と多岐にわたる深い論議がなされ、私達新入生もいつしか心の垣根をとり払い、旧知のごとく議論を戦わすようになった。いや、それだけではない。輪は輪をよんで、どんどん広がり、中には、たった一日で他の大学の方と仲よくなったサークルもあった。

新入生歓迎会ではハウスの職員の方も飛び入りで歌を披露してくださった。また、レクリエーションの時、私達の中に加わってこられた外人教授の人なつっこい目は、そのアカデミックな雰囲気とともに、このハウスを象徴するように思えてならなかった。

（東京大学　原口一博）

【東京医科歯科大の医・歯両学部】 入学式の翌日、今年も学長、学部長はじめ二五名の教職員と新入生一八二名全員がこの丘に移動して、恒例の全学的合宿を実施している。当ハウスはこれらの集会の開講にあたり、当ハウスとその生活についてのガイダンスを行い、新入生が大学生活の中で当ハウスと意味のあるつながりを深められるよう求めている。

△△

新入生校外オリエンテーションとして、今年の4月に初めて大学セミナー・ハウスを訪れたが、その印象はきわめて鮮明に私の脳裏に焼きついている。

たった一晩ではあったが、まだ見知らぬ同級生達と寝起きを共にすることにより親しくなり、そして学部の先生方に、医学という私たちが学びすすんでゆく学問についてお話を伺うことができて、とても有意義であった。また、食堂に掲げてあった「生活は簡素に、思想は高潔に」という文句は、すんなりと私の心にはいり、今でも時々思い出すようにしている。

学問やスポーツを通しての他大学との交流は、単科大学の学生である私にとって、とても魅力のあるものだ。私は、ぜひ大学共同セミナーに参加しようと思っている。なぜなら、このセミナー・ハウスは、きっと私の期待にこたえてくれるであろうから。

（東京医科歯科大医学進学課程　一條智康）

△△△

私の知っているかぎりでは日本の大学セミナー・ハウスに相当する施設はタイにはないようである。学生同士が、何人かの先生の指導の下にグループを作り、ある特定の宿舎に集まってそこで一時的に団体生活をしながら、皆で友達を作ったり友情を深めたり話し合ったり、相互に意見を述べ合ったりして集団的行動を行うような機会はほとんどなかった。もっとも全然なかったというわけではなく、そのような機会も二、三回はあった覚えがあるのだが、それらはいずれもボーイスカウトの訓練や勉強のために行われたものであった。経済的事情が許さないためか、タイの宿舎は日本のそれとは比べものにならないほど不便である。宿舎は非常に簡素であり、そこで寝泊まりすることは日本人にとってはとても不便に感じられるであろう。というのは校外宿泊（課外活動の一種）は主にボーイスカウトの野営訓練を対象として行われているからである。したがって宿舎は四方を緑に囲まれて俗世間からかなりかけ離れた場所にあるのが普通である。おまけにある地域にはこういうような宿舎は作れないので、時として田舎の小学校を利用する場合もしばしば見られる。

こうしたタイの事情を考えれば、このように恵まれた大学セミナー・ハウスに対して私がどういう印象をもったかはもう皆様には見当がついたことであろう。

（東京医科歯科大学医学進学課程　外国人留学生（タイ）　黄国豊）

【東海大学】 当ハウスでの合宿の有効性を年毎に強く認めてきており、医学部、医療技術短大の新入生オリエンテーションは、ここ数年恒例化した。ともに4月の中旬に、二泊三日で実施されており、今年も医学部は延二九六人、医療技術短大は三九四人の宿泊を数える大型合宿となった。いずれも余裕のある日程には、ガイダンスの他に特別講演、映画、先輩を交えての自由懇談、スポーツ、キャンドル・サービスなど多彩なプログラムが組み入れられ、より充実した共同生活とするための教職員・学生双方の工夫が見られた。

△△△△

私達看護学科の新入生一六〇名が、初めて大学セミナー・ハウスへ訪れ、東京とは思えぬほど緑に囲まれている八王子のすばらしい自然に驚き、感激した。そして自分自身の生活に一つのピリオドの

役割を果たしてくれたような気がしている。また、高校生活から大学生活へのスタートを切った私にとって、実に多くのものを教えられたような気がする。

そして小グループに分かれて、まだ見知らぬ同級生達と先生を囲んで、テーマ別にディスカッションを行った。なんとなくよそよそしかった始めに比べ、寝起きを共にすることによって、それまで心にしまっておいたことを、話し合えるようになった。ただ私は、議論においては、自分の考えを的確に要約し、相手にわかって貰えるように発言すべきことを痛感し、自分ながら情なく思った。

しかし、たった二泊三日のセミナーだったが、そこで得たものは非常に多く、これからの看護婦を目差すものとして大きな影響を与えられたような気がする。

そして、自然の中で先生や友達とじかに触れ合うということは、なんとすばらしいことかということを痛感した。

（東海大学医療短期大学　佐藤美津子）

●今年、初めて新入生オリエンテーションで利用した青山学院大学の場合は、一つは文学部教育学科新一年生のオリエンテーションと歓迎会で、一五二名が参加。もう一つは第二部の新入生のために、日曜日帰りの野外オリエンテーションが行われ、当ハウスの「出会いの丘」の芝生に参集した六五名の勤労学生と一六名の教職員を前に、保坂栄一学長が「夜に学ぶ」と題する感話を述べておられた。

●もう一つの新しい企画は、4月末に実施された慶大国際センター主催の新入生合宿で、これには六ヵ国からの留学生一九名（うち七名は上級生）、帰国子女二四名、それに日本人学生と教職員、計五五名が参加し、学習上の諸問題について懇談し、人間的交わりを深めた。当ハウスの国際セミナー館が各大学のこの種の集会に活用されることを願ってやまない。

△△△△△

留学生、日本人学生、それぞれの新入生と上級生との交流も深められ、皆、今回のこの催しに満足してくれたことと思います。私自身、その企画を行った一人として、皆からの反響を聞き、喜んでいるところです。

特に、都心から近いところにありながら、美しい自然にかこまれた大学セミナー・ハウスで行うことができたということが、この度の成功の大きな要因になっていると思います。私たち学生は、国際セミナー館とユニット・ハウスを、また、いろいろな集まりを行う時などは大学院セミナー館を使わせていただきましたが、それぞれの建物がもつメリットを活用することができ、それが今回の企画の成功を大いに助けてくれました。今回の成功から来年もおそらく同じ様な計画が考えられると思います。

（慶応義塾大学　中原　一）

＜キャンパス寸描＞

●4月14日＝夕食時に四大学二五九名が交歓。特に新入生の来館を歓迎。夕食後、東大教養学部、上智大学生寮のオリエンテーションに参加の新入生、両校合わせて一九八名に講堂に集まってもらい、当ハウスの施設の利用、教育プログラムへの参加を呼びかけた。

●4月18日＝東海大医学部の新入生一五七名が、持参したくすの木の苗木二本を第5群下の斜面に記念植樹した。（9頁写真）

●4月22日＝月例の遠来荘茶道教室に日本女子大社会福祉学科の新入生など二〇名が参加。

●5月1日＝第25回目の公演を前に英語劇「マクベス」の稽古で四泊した学習院大シェイクスピア劇研究会のメンバー二〇名を館長が交友館でのお茶の会に招待した。なお、4・5両月の交友館は、新入生と上級生の交歓の場としてもフルに活用された。

●5月6日＝国際ロータリー第二五八地区主催第3回青年リーダー・セミナーが二泊の日程を終了。参加者二七八人全員が見守る中で記念植樹が行われ、本館東側の斜面に紅白の「はなみずき」が植えられた。

●5月15日＝立大・三戸公教授とゼミ参加学生三〇名が第5群裏斜面に集まり、数日前に植えられた「けやき」の木を囲んで植樹祭を行った。

●5月20日＝矢内宗紫先生（相模女子大講師・千人会会員）と門下生による野立ての茶会が中央庭園で行われ、東京女子大福田一郎ゼミなど在泊グループ約八〇名が参加。なお、この茶会に引き続き、交友館前庭バーベキューコーナーに設けられた東屋風の屋根と木製ベンチ「麒麟亭」の落成を祝い、茶会出席者と職員有志がバーベキューのかまどの〝試運転〟をかねて小宴を行った。（写真）

●5月23日＝東京神学大が初のクラス別全学修養会を実施。大木英夫学長他七名の指導教授を館長が交友館でのお茶に招待した。

職員手づくりの麒麟亭の落成を祝って
（バーベキューのかまど開き）

●寄贈図書

54年3～4月

「現代詩研究」No. 292　現代詩研究所殿
「国際協力」2～3月号　国際協力事業団殿
「政治経済史学」No. 146～151　政治経済史学会殿
「アインシュタインと現代の物理」　江沢　洋殿
「世界の幸福論」「社会学論叢」No. 74「中央公論」5月号、「安楽死論集」第三集　笠原正成殿
「採集と飼育」3・4月、「オニヒトデの対策研究」日本科学協会殿
「A Revolutionary Gospel」「New Foundation」「Christ as Prophet」　ルイス・ベンソン殿
「物価史」第2巻　金融経済研究所殿
「柳田国男生誕百年記念国際シンポジウム：民俗調査報告書」　日本民俗学会殿
「大学時報」No. 145　日本私立大学連盟殿
「同志社時報」No. 66　同志社大学殿
「シネマ英会話」　荒井良雄殿
「二十一世紀の大学」　尾形　憲殿
「財政学」「要説・日本の財政」　佐藤　進殿
「現代資本主義の危機」緒方俊雄殿
「川島定雄博士論文集」　松井源吾研究室殿
「アジアの昔話」4、「Asian Culture」No. 22　ユネスコ・アジア文化センター殿
「立教」No. 89　立教大学殿
「経済発展理論」　鳥居泰彦殿

●寄付金報告

54年5月末現在

ご支援を感謝して拝受いたしました。

＜一般寄付金＞

五、〇〇〇円　学習院大学　河野豊弘ゼミナール殿
三、〇〇〇円　慶応義塾大学教授　小泉　仰殿

＜植樹寄付金＞

四五、六〇〇円　国際ロータリークラブ第258地区青年リーダーセミナー　望月継治殿
二六、八〇〇円　産業能率短期大学第7回特別スクーリング　同大学教務部通信教育課殿

＜視聴覚施設・設備充実募金＞

二、〇〇〇円　法政大学山本ゼミ殿
五〇、〇〇〇円　法政大学教授　鴨沢　巌殿
一〇、〇〇〇円　千葉商科大学助教授　影山僖一殿

●館長日記から

8月になると原爆反対、核反対の叫びが一段と高まる。6日の早朝、松下館屋上で利用者有志と共に原爆忌の集いをした。文教研にきていた広島の教師方に真理の鐘をついてもらい、全館黙禱を捧げた。◆安井郁前法政大学教授は原水禁運動の代名詞のような先生である。田鶴子夫人と共に杉並周辺に住む主婦達を集めてつくった「杉の子会」がこの運動の発端であった。先生はいま七二歳、重い病床にある。古希記念ゼミを学生が計画されたのが印象に残っている。記念樹の梅がある。長い千人会員である。原爆忌の8月、私の脳裏に安井先生夫妻のお姿が浮ぶのも深いご縁があってのことである。◆15日の朝7時、千鳥ケ渕戦没者墓苑に詣でるため終戦記念礼拝に出席した。ルカ伝18章を14節まで読む。緑の濃い墓苑は風もなく、祈りの声だけが静かな空気をおごそかに動かしている。◆『昭和万葉集』を入手した。戦争の犠牲者だった人達が詠んだ悲哀の歌集である。私の敬愛する友人、神戸照子さんの一首が入っている。東大助教授だった夫君はレイテ島で戦死されたのである。◆7月31日夕刻から遠来荘で山内恭彦先生の喜寿祝いの宴を開いた。先生は共同セミナー育ての親、そして遠来荘の名付け親である。千人会員第一号である。人も知る学際的物理学者である。人が集まるのは人徳のためか。欣々然として一流学者二〇人が集まり心からお祝い申上げた。今晩が本番で、7月7日の東京会館は序幕だったという程に歓をつくして語り、飲み、歌った。最高にたのしい会であったとの賛辞を交換して8時半閉会。◆6月15日、外務省参事官小和田恒氏が東京サミット直前の閑をみつけて来訪された。ハーバード大学で国際法を講義するため、近く渡米するとのことであった。ICUの横田洋三助教授にも同席してもらい、交友館で別れを惜しみながら宴を楽しんだ。同氏は日米通商交渉日本代表に米国側から名指された程に信望の厚い外交官である。国際セミナー館の建築に力を貸して下さった友人である。千人会員であり、東大講師としての利用者でもある。◆「建築文化」9月号で当ハウスの建築が総括編集されている。早大教授吉阪隆正教授の主宰するU研究室の設計になる全ての建物が、多摩の丘にすっかりとけこんでいる。一七年の間に樹木が成長し、一層建築をひきたてている。理念が生かされている建築群の丘はまさにキャンパスに値いする風景をつくっている。U研究室のすぐれた作品である。編集者は人生を賭けた男の狂気の証明が建築に表現されているといった。四〇ページにわたる写真は十分鑑賞に値いする芸術作品となっている。千人会の方々に一冊贈呈したいような気持である。是非お買い求め下され、当ハウスの「伝統と創造」をお考え願いたい。私の一文も載っている。

＊

ささやけき餞(はなむけ)なれど
征く夫の銃(つつ)拭く布と
わが袖を断つ　神戸照子

一五、000円　第102回大学共同セミナー・セクション指導教授
立教大学教授　村田　全殿
慶応義塾大学教授　小泉　仰殿
大阪大学教授　中川米造殿
東京女子大学教授　水谷静夫殿
東京外国語大学教授　長　幸男殿
六、一五〇円　第102回大学共同セミナー参加学生一同殿

＜現物寄付＞
くすの木（二本）
東海大学医学部殿
絵画（富士山）80号P
女子美術大学教授　郡山　正殿
六人掛テーブル三個
六人掛座卓三個
株式会社　新宿一色殿
茶器・茶碗一〇個（自作）
日本大学学生　浦田栄都央殿

●利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用

4月＝五、〇三二人
5月＝四、八八六人

■4月

中央大学教授　吉村　二郎
明治大学学生保険委員会
学習院大学音楽愛好会
上智大学聖書研究会
津田塾大学ESS
明治学院大学助教授　橋本　敏雄
法政大学教授　山本　満
相模女子大学助教授　巻　正平
法政大学教授　尾形　憲
青山学院大学教授　深沢　実
上智大学教授　古野　陽一
法政大学教授　佐藤　康男
青山学院大学教授　日向寺純雄
青山学院大学教授　原　豊
東京女子大学人形劇研究会
一橋大学講師
明治大学助教授　神武庸四郎
東京都立大学教授　高木　仁
日本大学教授　石村　善助
明治大学教授　近藤富士雄
早稲田大学講師　設楽　正雄
明治学院大学助教授　深沢　実
明治大学助教授　西野　万里
上智大学教授　F・ペレス
日本大学教授　鈴木　喬
東京大学哲学研究会
東海大学教授　藤家礼之助
明治大学マーケティング研究会
成蹊大学助教授　中里　明彦
中央大学岩崎読書会
神奈川大学助教授　丹下　敏
東京大学教授　佐藤　進
明治大学教授　岩内　亮一
東海大学教授　鈴木　守
神奈川大学助教授　森田　尚人
明治学院大学教授　宮野　彬
中央大学教授　池上　一志
東京薬科大学新入生歓迎会
駒沢大学助教授　谷敷　正光
日本大学講師　小関　勇
中央大学助教授　緒方　俊雄
駒沢大学教授　馬屋原成男
日本大学講師　市村　隆哉
一橋大学教授　斎藤　忠利
東京学芸大学幼稚園教育学科
成城大学助教授　村本　孜
東京医科歯科大学新入生校外オリエンテーション
中央大学教授　竹村　孝雄
法政大学教授　下川　浩一
東海大学医療技術短期大学新入生オリエンテーション
日本大学教授　原田　行男
早稲田大学教授　吉阪　隆正
明治学院大学助教授　秋山　智久
東京大学教養学部新入生オリエンテーション＊＊
成蹊大学教授　宇野　重昭
上智大学学生寮オリエンテーション・キャンプ
法政大学教授　高橋　誠
神奈川大学助教授　堀野　定雄
横浜国立大学教授　佐藤　精一
東海大学医学部新入生研修会
青山学院大学教育学科新入生オリエンテーション
神奈川大学教授　小山吉之助
日本女子大学助教授　梶田　叡一
東京薬科大学教授　志田　信男
日本女子大学文学部社会福祉学科新入生オリエンテーション
駒沢大学教授　大久保治男
慶応義塾大学助教授　笠井　昭次
慶応義塾大学助教授　棚橋　隆彦
中央大学税務会計研究会
青山学院大学助教授　長谷川浩一
専修大学教授　刀根　武晴
法政大学教授　村上　直
東京農工大学教授　金子　六郎
一橋大学生活協同組合
日本大学助教授　遠藤　邦彦
駒沢大学助教授　浅野　克巳
東京大学助教授　石川　経夫
電気通信大学生活協同組合
東京大学助教授　西村　肇
早稲田大学LEI
東京大学教授　森田　桐郎
慶応義塾大学国際センター
明治大学短大教授　岡山　札子
立正大学助教授　厚東　偉介
千葉大学医用電子工学研究会
日本女子経済短期大学講師　宮本　勉
山梨大学助教授　森　英雄
淑徳大学講師　清川　英男
東京都立工科短期大学機械工学科新入生オリエンテーション
東京都立商科短期大学経営学科新入生オリエンテーション
総合科学研究会

東京目黒YMCA
セイシン企業
新東京日産自動車販売
高島屋労働組合
京王帝都電鉄
小西六写真工業
ソフトウェアマネジメント
八王子大丸労働組合
流研
久星酒造
日野協力会
ウェラ化粧品
オープンインターユーロップ
【個人利用】
法政大学助手　石見　徹
東京女子医大講師　加藤　耀子
芝浦工業大学教授　十代田知三
玉川大学講師　甲斐　隆
【日帰り】
青山学院大学第二部野外オリエンテーション

予告

▼第104回大学共同セミナー
主題　ルソーと共に現代を問う
——人間は自由なものとして生まれた——
期日　昭和54年10月12日～14日
＜全体講義＞
I　ルソーの生涯と作品
立教大学助教授　原　好男氏
II　ルソーの読まれ方
東京大学教授　小林善彦氏
＜セクション演習＞
Aルソーの文明批判（林道義氏）／B自立した人間を育てるもの（室俊司氏）／C政治における自由と疎外（宮島喬氏）／Dルソーの自伝のなかのルソー（原好男氏）／E初期のルソー思想（小林善彦氏）
＜ゲスト講演・レコードコンサート＞
ルソーを聴く
国立音楽大学学長　海老沢敏氏
＜申込締切日＞10月4日

▼第105回大学共同セミナー
主題　日本人と＜家＞——新しい人間の絆を求めて——
期日　昭和54年11月9日～11日

▼第16回大学教員懇談会
主題　第一回『共通第一次学力試験』の成果と課題
期日　昭和54年9月29・30日
＜発題者＞
大学入試センター所長　加藤陸奥雄氏ほか
＜世話人代表＞
国際基督教大学教授　三宅　彰氏
＜参加人員＞約60名

テーション
■5月
東京都立大学助教授　柳沢　治
専修大学教授　麻島　昭一
学習院大シェイクスピア劇研究会
津田塾大学講師　梶田　孝道
青山学院大学ACF
東京都立大学教授　矢野　茂樹
駒沢大学教授　馬屋原成男
中央大学教授　桐谷　幸治
東京大学教授＊　内田　忠夫
東洋大学助教授　松本　恒之
一橋大学教授　荒　憲治郎
芝浦工業大学電算機研究会
日本大学教授　北野　弘久
中央大学教授　一井　昭
法政大学助教授　公文　溥
法政大学助教授　岡　孝
東海大学教授　師岡　孝次
早稲田大学応用化学科新入生オリエンテーション
千葉商科大学助教授　影山　僖一
東京大学教授　田中三千夫
学習院大学教授　河野　豊広
早稲田大学教授　成田誠之助
法政大学助教授　石坂　悦男
明治大学講師　森　久
東京学芸大学物理学教室新入生合宿研修
東京学芸大学理科教育学科新入生合宿研修
慶応義塾大学教授　小茂鳥和生
立教大学講師　小林　晃
筑波大学教授　吉本　市
東京学芸大学生物学教室新入生合宿研修
中央大学学生相談室
神奈川大学助教授　池上　和夫
立教大学教授　三戸　公
工学院大学教授　波多江建郎
法政大学教授　兼子　春三
東京理科大学教授　富沢　稔
成蹊大学教授　佐々木克巳
電気通信大学通信工学科新入生オリエンテーション
法政大学教授　下森　定
芝浦工業大学教授　高橋　清
東京都立大学物理学教室新入生オリエンテーション
東京女子大学教授　福田　一郎
中央大学教授　松本　正徳
東京経済大学教授　富塚文太郎
中央大学講師　南塚　信吾
慶応義塾大学教授　村井　実
中央大学教授　寺内礼治郎
法政大学助教授　松崎　義
東京学芸大学講師　松岡　栄志
中央大学助教授　高田太久吉
青山学院大学青山子ども会
駒沢大学教授　斉藤　寿
東京工業大学教授　松田　武彦
明治大学教授　松瀬　貢規
立教大学教授　水本　浩
早稲田大学助教授　常田　稔
国学院大学講師　林田　孝和
玉川大学教授　彦由　一太
女子聖学院短大講師　浜田　辰雄
都立立川短大新入生歓迎セミナー
職業訓練校新入生合宿セミナー
産業能率短期大学通信教育課程スクーリング
都立商科短期大学新入生オリエンテーション＊＊
文京女子短期大学学生相互理解セミナー＊
東京神学大学クラス別修養会
和光大学教授　小峯三千男
高津看護専門学校
国士館大学助教授　大庭　治夫
白百合学園高等学校
第102回大学共同セミナー
計測自動制御学会
水海道婦人会
国際ロータリークラブ第258地区青年リーダーセミナー
国立療養所東京病院附属看護学校
東京YMCA英語学校
東洋ガラス
京王百貨店
千野製作所
ソフトウェア・マネジメント
日本電気コストコンサルティング
ウェラ化粧品
【個人利用】
司法修習生　道本　幸伸
芝浦工業大学教授　十代田知三
三井金属鉱業　横山　昌寛
関東学院大学講師　湯沢　正信
【日帰り】
八王子モラロジー事務所
工学院大学専門学校教授　中西昌太郎

◆ご挨拶

専務理事　岡山　猛

こんど、はからずも大学セミナー・ハウスに奉職することになりました。毎日、この多摩の丘陵に通い、自然の光と風の中で学問と交友をたのしむ若い人びとに接し、かつての青春の日々を思いかえしています。大学セミナー・ハウスも開館十五年、草創期の歓びや苦しみが早くも遠い昔のことのように回想される時期に入ったようです。キャンパスを織りなす自然・施設のどれもこれもが館長はじめ多数先人たちの夢と愛と献身によって育くまれ成長してきた、そのこまやかな息吹きを実感します。それらを基礎に、当館創立の理念を具体的事業の中に実践、完成させるべき、この地道で根気のいる仕事に仲間入りすることの意味を噛みしめています。みなさんの御助言、御鞭撻をお願いします。

●編集後記

本号には、昭和53年度の総括が記載されている。ことに業務白書は、年毎に拡充してきた宿泊施設を、創立の目的に照らしながら、いかに活用し利用層を拡大していくか、という大きな課題を示しているように思われる。

この7月5日をもって開館十五年目に入った大学セミナー・ハウスのことを読者とともに考えたいので、巻頭に「伝統と創造」を掲げた。（能）